泌尿器科紀要

第6巻 第8号

昭和35年8月

随想

第55回全米泌尿器科学会

京都大学医学部泌尿器科学教室 友吉唯夫

第55回（1960年）全米泌尿器科学会は5月16日から4日間 Chicago 市の Palmer House にて開催された．参加人数は事務局の発表によると会員即ち泌尿器科専門医619名，泌尿器科の Junior Attending Men などを含む Guests 317名，及び泌尿器科 Residents 139名，計1,075名であつて連日会場を埋めつくす盛況であつた．

Palmer House は豪華なホテルである．先ず発表内容を分類しながら概観することによつて最近の傾向を探つてみたい．

1. 診断手技及びX線に関するものとしては，経直腸的前立腺バイオプシーが的中率において他法に優れているという発表が125例の経験にもとづいて行われた他，最近流行の Cineradiography を用いたものが，尿道筋作用の研究，尿管逆流現象をもつ小児の膀胱及び上部尿路の研究等計3題あつた．排尿機構を正常の場合，前立腺摘出後，先天性後部尿道弁膜形成例などにおいて描き出しており，排尿時の尿管口と後膀胱頸部との関係即ち三角部筋群の作用，女子尿道括約筋の存在なども併せてフイルムにて示された．

2. 尿路感染症に関する口演は2題のみで，一つは Pseudomonas Infection に対する Coly-Mycin の応用，他は間質性膀胱炎に抗ヒスタミン剤の効くのは本症が肥胖細胞（Mast Cell）の出すヒスタミンによるという主旨のものであつた．

3. 泌尿器外傷に関するものは腎穿通性外傷98例をまとめた Texas の Dr. Carlton の発表1題であるが，一般に外傷の頻度は日本より多いように思う．

4. 腎機能に関するものは Michigan 大学の Stop Flow Analysis 1例のみであつた．

5. 腫瘍に関係したものはかなり多かつた．泌尿性器系腫瘍の手術中，循環血流中の腫瘍細胞出現率を研究したものは Dr. Jonnason が女性であることも手伝つて多大の拍手を呼んだ．彼女は Wilms' Tumor に於ては100%，膀胱腫瘍では35%に血流中腫瘍細胞を証明している．但しこれら細胞の臨床的意義については細胞自体の能力と宿主抵抗性の点から疑問の余地があると結論した．

睾丸腫瘍については3題もあつた．睾丸間質性腫瘍70例をまとめたものが Washington, D.C. にある Testicular Tumor Registry の Dr. Mostofi によつて発表された．全国的な研究組織をもたない我国では分散的な症例はあつてもこのように多数例をまとめることは不可能である．他の2題は Michigan 大学の睾丸腫瘍178例の観察，New York, Memorial Hospital の睾丸腫瘍の転移に対する化学療法といつたところである．

膀胱癌に対する Cobalt^{60} 照射療法が5年生存率を25%に引上げたというのが膀胱腫瘍に関する唯一の発表であるが，膀胱癌はすでに論議しつくされた話題なのであろうか．

尿路性器の悪性腫瘍の肺転移巣に対し肺切除を行つたという Buffalo 大学の発表はむしろ胸部外科の問題であろう．Columbia 大学の上皮小体腺腫と結石症との関係を70例について論じた報告は TRP test を指標として結石症患者の上皮小体を手術的に検索するのがよいと結論した．

6. 手術に関するものは断然多く，その大部分は天然色映画にて示された．これが実験数値の羅列の多い日本の学会よりも楽しさを倍加している．計17もの発表があつたので，その全部を列記することはできないが，比較的目新らしいところでは高血圧に対する Renal Vascular Surgery，尿管逆流現象に対する尿管膀胱新吻合術の種々の方法，古典的なところでは恥骨後前立腺摘出術500例の結果的考

察といつたようなものや各種尿路奇形に対する手術，前立腺手術などがみられた．実験的なものが1題あつて犬尿道を括約筋をも含めて切除し，それを脱粘膜化した Ileum Segment で置換したMassachusetts General Hospital の発表である．

7. TUR に関しては先ず所謂 Post-TUR Syndrome が細胞外性低ナトリウム血症にもとずくものでその防止に高張食塩水がよく，併せて低圧灌流を提唱した Texas の Dr. Ceccarelli の発表，つづいて TUR 中の電解質の変化は臨床的意義がないと結論した California の Dr. Whisenand の発表があつた．追加討論として Minneapolis の Dr. Creevy は TUR 中血圧をショック近くまで下げることがよく，灌流圧は TUR 中視野を充分見えるようにするため確保して差支えないと述べた．Mayo Clinc の Dr. Greene は TUR 後の膀胱頸部 Contructure は当部を深く切除しすぎたための瘢痕形成に基づくものであるから膀胱頸部にタッチせずに腺腫のみに切除を行えと主張し注目されたが，かかる経験なしという Atlanta の Dr. McDonald の反論もあつた．

8. 注目の特別講演は Dr. Reed M. Nesbit の"まだ希望のもてる Ureterosigmoid Anastmosis"と題するもので，多数症例が腎盂像，電解質ともほぼ正常に経過して10年以上生存している事実をもとに，過塩素性酸血症は必ずしも起らず，逆行性感染は吻合を工夫することによつて防げるから見捨てたものではないという主旨で，すでにかえりみられなくなつた本法を根気よく Follow up している点はさすがであり，流行を追うことが学問でないことを感じさせるものであつた．

9. Panel Discussion が3つあつた．先ず Dr. H. M. Spende の司会で行われた尿管逆流現象についての Drs. J. A. Huch, W. F. Leadbetter, V. F. Marshall, C. M. Stewart 等の討論は本学会中の白眉で，病因，診断方法，治療などを多角的かつ具体的に論じ極めて程度の高いものであつた．討論者間には極端な意見の対立がみられた．例えば Dr. Hutch が本現象は尿管膀胱接合部の解剖学的な欠陥で説明でき膀胱頸部狭窄に起因するのは5％に過ぎぬというのに対し，Dr. Stewart は90％は後者が原因だといつた如きであるが決して感情の対立に発展しない Dr. Marshall は臨床的原因として御得意の Megacystitis を強調，Dr. Leadbetter は Pyelonephritis との関係に注意を促した．治療法でも尿管膀胱新吻合術を行うという前三者と行わないという Dr. Stewart との間に意見は対立した．第2の Panel Discussion は Pyelonephritis についてであり，Dr. V. J. O'Conor の司会で行われたが，これは逆に聴衆に満足を与えなかつた．学会の最後に行われた"泌尿器科領域における出血の問題"と題するパネルは病理学者1人，内科1人，外科から2人の論者を動員して Dr. R. H. Flocks の司会で，地味ではあるが最近の凝血学説，内科的及び外科的止血剤の問題，手術中に於ける血管損傷の処置，前立腺手術の術中及び術後の出血の問題などが順次論ぜられ，学ぶところがあつた．止血剤の効果は期待できないという結論であつたようだ，

大体以上のようであるが日本の学会で目立つて多くなつたといわれる性現象や性ホルモン関係のもの（泌尿紀要本年第3号編集後記参照）がほとんど見あたらない．最後のパネルが終ると聴衆はどつと会場を去り Dr. Burns の閉会の辞と次期会長の紹介に残つた者は数える程しかいなかつた．そういうことに居残ることの余り興味のないことはよく分るし日本の学会でも多少ともその傾向があるがこれでは会の形がくずれてしまい，Dr. Burns が "Please Stay!!,, と声を大にして叫んだのも無理はない．ただ気持のよかつたのは口演時間が厳重に守られたことで与えられた時間内に終了しないものでも会長がすぐにそばへ寄つてきて "Thank you very much" といつてマイクを取り上げるので強引な続行は不可能である．尚明1961年は Los Angeles にて会長 Dr. J. E. Heslin(Albany, N.Y.) のもとに行われる．

大阪市大外科の原田助教授も多忙な旅程中に拘らず屢々会場へ姿を見せられた．氏は人工膀胱に関する研研（J. Urol., 81　754-762, 1959）がアメリカ形成外科学会の最高賞を得たのを機会に渡米されていたのであるが，その Originality のある業績が日本よりもむしろ外国に於てより高く評価されたということは日本医学の外国依存性の一面でもある．

会期中の Chicago は天候に恵まれず，折からパリの四大首脳会談が U-2 機事件をめぐつて決裂したことを Chicago Tribune が報じて世界平和の前途に暗い波紋がなげられた．

最後に米国に留学中の医学徒としてひとつ気になることをつけ加える．それは American Medical Association を中心に外国人医師に対する排斥運動が陰に陽に盛んとなり，最近 LOOK という週刊雑誌（発行部数570万）にきわめて露骨な記事がのつたことがある．心あるもののプライドを傷つける内容であり，彼等の優越感のあらわれならそれでよいが，国家主義的傾向に支えられたものとすれば他国から学ぼうという意欲に乏しいアメリカ医学の限界をそこに見るような気がする．

（1960年5月30日記）